

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ⑤

里の秋の風物詩

柞紅葉(ははそもみじ)
が美しい里山

日本アルプス・東北の高山、北の国では紅葉も終わり冬枯れになった頃、近畿の高い山では紅葉が始まります。昨年の一二月後半に退職教職員伏見支部の秋のバス旅行がありま

した。行き先はびわ湖バレイです。ゴンドラに乗って動き出すとしばらくして美しい紅葉に出会いました。それもつかの間、山頂に近づくと葉は落ちて冬枯れの世界が待っていました。里から山頂までで色づき初め、紅葉盛り、散り終わりという落葉樹の世界が同時に見られました。それから一ヶ月あまりの「大雪の候」、里にも冬が訪れます。昨年は秋の終わりに重なるように一気に冬がやって来て大雪に見舞われました。

昨秋の里山の紅葉は例年になく美しかったように私は思っています。皆さんはいかがでしたでしょうか。その中でも桜の紅葉(さくらもみじ)とコナラやクヌギの紅葉(ははそもみじ)がいつになくきれいに色づいていました。例年だと桜の葉が色づく頃にはくすんでちりちりになって目を留めることも少なかったのです。が、昨秋ばかりは、私の周囲にいる

人も「桜の紅葉がこんなに美しいとは知らなかった」と話していました。それに秀逸だっ

たのは「ははそもみじ」です。私がこの言葉を知ったのは二三年前です。一二月も末になると京都や滋賀の里山の多くは褐色に染まります。でもすぐに枯れ葉色になってしまいうのですが、昨年の秋は少し違っていました。黄褐色から赤味を帯びて赤褐色にそして褐色に変化しました。またその変化が山全体を覆い派手さはないが明るく落ち着いた錦を被ったようでした。

「柞(ははそ)」とはコナラの別称です。かつて里山といわれる人里に近い低山・丘陵では、薪炭やホダ木



柞紅葉

に使うために多くのコナラやクヌギが植えられていました。そのため秋になると、里山では雑木とともにそれらが美しく色づき古来より「ははそもみじ」と呼ばれていました。「古今集」「後拾遺集」などにも「ははそ」を題材にした多くの歌が詠まれました。

（古今集）佐保山のははその色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな 坂上是則

（後拾遺集）いかなればおなじ時雨にもみぢする杵の森のうすくこからん 藤原頼宗

（続古今集）夏の日は陰にすずみし片岡のははそは秋ぞ色づきける 能因法師

タカノツメの香りとカツラの香り

秋の里山に五感を澄まして歩くとき様々なものが伝わってきます。実にカラフルな葉の色、一枚ずつ並べる

と何十色の色鉛筆もかなわないほどのすごいグラデーション。

こうした色の一つ一つに名前を付け和の色が生みだされてきたのでしよう。時々吹く風に大きな木の枝から黄色に染まった葉が舞い散ります。まるでキチヨウが乱舞をしているかのようです。どこまでもどこまでもとんでいきます。舞い降りた葉はつまり、私たちが歩く度にカサカサ、コソコソと音を立て秋を実感させてくれます。ある晩秋の朝、湖西の里山を歩いていると、ほのかに甘い香りがどこからともなく漂ってきました。「一里一尺 自然をたずねて②」でお話しをしたカツラの葉とそっくりの香りです。しかし、私が歩いていた場所を探してもカツラの木は見当たりません。あったのはタカノツメです。この木はしつかり色づくくと真っ黄色になりイチヨウのように素晴らしい黄葉になります。甘

い香りはこの木の葉が落ち黄色から褐色に変わる頃、朝露を帯びて発していたのです。



タカノツメの落葉

読者の中にはタカノツメと言ってもピンとこない方もおられるかと思いますが。同名で唐辛子の「鷹の爪」というのがありますが、それとは全く別物でウコギ科の落葉広葉樹のこです。名前は冬芽の先がとがり鷹の爪のようだという事に由来するようですが、私はどうも腑に落ちません。少し調べていると「葉が三出複葉でタカの爪に似ているから」というのもありました。名前の由来はすぐく納得するものと、そうかな？と思うものなど色々ありますね。まずは自分で見て自由に受け止めれば

いいのかなと思います。ウコギ科には独特の苦味と特有の香りを持つものが多く、それが好のまれタラノキ、コシアブラ、ハリギリ、ウドなど山菜と呼ばれるものが多いです。このタカノツメもまた山菜として食せることは「知る人は知る」です。しかし若葉の香りは落ち葉の甘い香りではありません。ここで蛇足ではありますが、季節を愉しむというところで山菜採りに行き、仲間と食することには楽しいことと思いますが、根こそぎとったり、二番目を摘んだりすることは植物にダメージを与えます。毎年愉しみたいなら植物への愛情と節度を持つてのぞみたいものです。

旬の味を愉しむ

ウド・タラの芽・コシアブラ

私も春になると仲間と野山に出かけ山菜を採って旬の味わいを愉しみます。前述の中で、まだハリギリは

食していませんが、他は毎年天ぷらにしたりしています。最近の山菜ブームでタラノキは気の毒なくらい採取されていて、節度のない取り方で枯れているものもよく見かけます。タラノキは受難です。



「かさかさ」と落ち葉を踏んで、



収穫した山菜（こごみ、タカノツメ、かんぞう、タラの芽、コシアブラ、わらび）

春になると山菜の王者のタラの芽（異論もあります）はさすがに広く認知されていて、昨今ではスーパーでもバックに入って売っています。しかしこれは何だか味気ない。味の感じも野生のものと違って少しまろやかでたくさん手に入るのはいいですが、何だかびりっとしたしまりがありません。それに自然の恵みを頂くにはやはり野に出て風や新緑を感じて旬の味に舌鼓をうってほしいものです。

タラノキは明るいところを好む木

で、林道の脇や法面、木が伐採されて明るく開けたギャップ（空間）などに一番先に生えてくる植物でパイオニア植物とか陽樹などと言われています。

落ち葉の量ってすごい

話を元に戻しましょう。各地の紅葉だよりが終わる頃、木々の葉はみな散り落ちて森の中は明るく歩きやすくなります。そして足下にはたくさんの落ち葉が積もります。この落ち葉の量たるやすごいもので、私が以前勤務していた栗東自然観察の森

では職員が毎朝観察路上の落ち葉を掃いていました。竹箒で掃いたものを集めると1㎡のビニールの籠に入れるのですが、ビジターセンターの周辺だけでも毎日一〇籠以上になり驚いたものです。これだけの葉が木々に付いていたのかと思うと樹の偉大さというか、樹の命を生み出しているしくみのすごさを実感せざるを得ませんでした。

きのこの季節

こうして落ち葉で地面が覆われる頃クリタケやナメコ、ムラサキシメジ、エノキタケといった最終盤のキノコたちが顔を覗かせる。



ナメコ三昧
切り株に生えたナメコ



たくさんの収穫



みんなできのこ汁を作る。
いい香りです。

ノコたちが顔を出します。これらのキノコはいずれも優良な食菌で、たくさん収穫出来るのでこの時期の楽しみです。この中でもナメコはどちらかというとブナやミズナラなどの生える冷温帯（落葉広葉樹林）によく発生します。私は毎年待つてましたとばかりにキノコ好きの仲間と晩秋の山野にきのこ狩りに出かけます。朽木の山奥に入ってミズナラやブナの倒木や枯れ木を探し回ります。倒木にヌメリがしたるように傘を広げたナメコ。お店に並べられた小さな蕾とは違い傘を開いておいしそうな香りを放っています。天然のナメ

コは傘を開くと五〜一〇cm程になります。これくらいの方が蕾より美味しいのです。

きのこ採りは面白い！食べられる

きのこペンションアップ！

大木の枯れた木に下から上までびっしりと出ているナメコを見つけたときには思わず「ナメコだ！」と叫んでしまい、他の仲間は転がるように集まってきました。そしてすっかりナメコ採りにはまっています。そんなわけで今年も出かけたのですが、坊主では無かったものの、その日の昼食になめこ汁を作ったらそれでおしまいということがわかりました。

クリタケもまた美味しいキノコの一つです。傘の色は名前の通り栗色をして、縁に白い毛羽立ちがあります。落ち葉の色と似ているので判然とせず目が慣れるまで見つけにくい



大量のクリタケ収穫



クリタケの姿

ですが、一つ見つけると目がキノコ眼になって結構探し当てます。私は退職後、岐阜森林文化アカデミーで植物生態学を学びに一人暮らしをしていました。その時、下宿の近くに

松鞍山という低山があり単独で登りました。頂上から濃尾平野を眺め下山しました。その時倒木に何やら褐色の塊が見えたので近づく

側に戻るとそこにも大量のクリタケがありました。それも収穫したのはいいのですが、そのつもりをしていなかったたので入れ物がありません。そこで着ていたヤツケを脱ぎそれで収穫したキノコを包み、空っぽのリュックに押し込みました。早速研究室に持ち帰ってリュックから出すと、なんとA3コピー紙の箱いっぱいになりました。部屋にいた学生や先生に貰ってもらいクリタケに成仏して頂けました。思い返すと、今でもあれは凄かったなあと思います。そんなこんなで「キノコはおもしろい」という世界にはまり込んでしまいました。

きのこは森のお掃除屋さん

前述した四つのキノコはいずれも分解菌と呼ばれ、枯れ木や倒木、落ち葉などを栄養源として、それらを分解して土に返す役割をしてくれて

います。その他にも多くの分解菌と呼ばれるキノコたちがいればこそ森の枯れ枝や倒木、落ち葉などが片付

けられ土へと帰ってくれているのです。難しく言えば「腐の食物連鎖」の一翼を担ってくれています。

すっかり葉を落とした落葉樹は今年の春を迎える準備を始めています。枝先を見ると春や夏に咲く花の準備、若葉の準備が冬芽という形で作られています。常緑樹も葉は付いているものの、冬芽で新葉や花を用意しています。こうして一年も終わりの冬は静に眠りにつきます。そしてこの拙文に目を通される頃、冬芽は少しずつ膨らみ春への目覚めを待っているでしょう。



冬芽ふくらむ(タブノキ)